

提示条件の相違による ASD 児の発話意図推測

○伊藤恵子 安田哲也 高田栄子 小林春美
 (十文字学園女子大学 人間発達心理学科) (埼玉医科大学 総合医療センター) (東京電機大学 理工学部)
 KEY WORDS: 自閉スペクトラム症・語用論・発話意図

【目的】

自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : ASD) における社会的文脈での言語使用の困難さは、かれらの語用論的能力に帰せられている(Martin & McDonald, 2004)。日常場面においては、話者の発する言語的意味とその発話意図は必ずしも一致するとは限らず、話者の発話意図を適切に読み取るためには、会話の文脈や話者の表情・プロソディーといった語用論的情報を統合して総合的に判断する必要がある。しかし大井 (2015) は、ASD における「意味が文字通りでない言語」の理解に成功したり失敗したりするという研究結果の不確定性を文献展望によって示し、研究参加者に与えられる条件が、結果に影響を与えている可能性を示唆した。研究参加者にどのような条件提示をするかということが、発話意図推測を検討するうえで重要といえる。本稿では日常場面に近い映像を通し、ASD 児が話者の発話意図を提示条件の相違によって、どのように推測するか調べることを目的とした。

【方法】

1. 対象児 : 6 歳から 12 歳の ASD と診断された児童 12 名 (男児 11 名, 女児 1 名, 平均年齢 11.3 歳, $SD=1.6$) を対象とした。WISC-IV, WISC-III, 新版 K 式発達検査による全検査 IQ(DQ)の平均は 100.43 ($SD=1.55$) であり、知的発達症の要因を排除するため、FSIQ, FIQ, 全検査 DQ を 70 以上とした。なお、本研究を行うにあたり、十文字学園女子大学・埼玉医科大学・東京電機大学の各研究倫理審査委員会の審査を経て、保護者と対象児に対し、調査目的及び方法を説明し、研究協力の同意を書面にて得た。

2. 刺激音声 : 言語的意味が相手を賞賛する肯定的表現 (きれいなね、おれいさんね、上手ね。)と言語的意味が相手を非難する否定的表現 (汚いなね、おばかさんね、下手ね。)の 6 語を選定した。息子役の男児に向かって、母親役の女性話者が発するこの 6 語と場面(肯定的, 否定的)を組み合わせ、賞賛・皮肉・冗談・叱責の 4 つの発話意図を構成した。賞賛は、肯定的場面において笑顔で高いトーンで肯定的表現語を発した。皮肉は、否定的場面において眉間にしわを寄せ低いトーンで肯定的表現語を発した。冗談は、肯定的場面において笑顔で高いトーンで否定的表現語を発した。叱責は、否定的場面において眉間にしわを寄せ低いトーンで否定的表現語を発した。

3-1. 刺激映像のみ提示条件 : まず、モニター画面上にビデオ映像による場面が提示され、続いて女性話者の表情が映し出されると同時に、場面に対応する刺激音声も提示された(計 12 試行)。

3-2. 状況説明後に刺激映像提示条件 : 状況を男性音声によって説明(例: 肯定場面では「きれいな手袋を持ってきました」、否定場面では「汚れた手袋を持ってきました」等)してから刺激映像が提示された。

4. 実験手続き : 個別に刺激映像を視聴後、同一モニターに以下の 3 つの質問 (①お母さんは何を言いましたか? ②お母さんの本当の気持ちは何ですか? ③それはなぜですか?) が文字と男性音声によって提示され、対象児は個別にこれらの質問にことばもしくは指さしによって回答した。

【結果】

刺激映像のみを提示した条件と、状況を男性音声によって説明してから刺激映像を提示した条件での ASD 児の発話意図推測の正当数を図 1 に示した。この結果に対して、条件 (2 : 刺激映像のみ・状況説明+刺激映像) と発話意図 (4 : 賞賛・冗談・叱責・皮肉) を独立変数とし、質問 3 における正答数を従属変数とした被験者内二要因の分散分析を実施した。その結果、条件の主効果が有意傾向 ($F(1,11)=3.80, p=.077$) であり、刺激映像のみ条件より、刺激映像に音声による状況説明を加えた条件のほうが、正答数が有意に多い傾向がみられた。また、発話意図の主効果が認められた ($F(3,33)=9.67, p<.001$) ため、多重比較を実施した。その結果、賞賛は冗談 ($p<.01$) および皮肉 ($p<.01$) よりも有意に正答数が多かった。冗談と皮肉および叱責においては有意な差は見いだされなかった。叱責はほかの発話意図と有意な差は見いだされなかった。

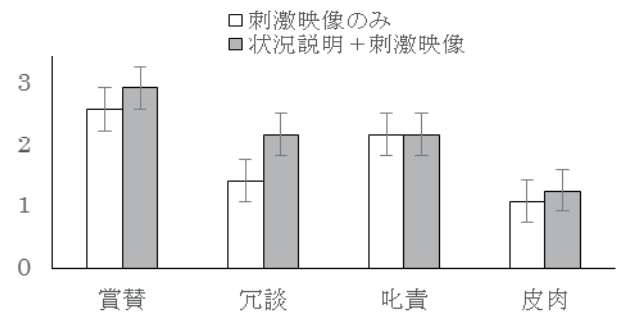


図 1 提示条件の相違による発話意図推測平均正当数

【考察】

以上の結果から、ASD 児に対して状況を映像のみで示した場合よりも、状況を音声で説明してから映像を示した場合のほうが他者の発話意図を適切に推測していることが分かった。WISC-III 知能検査結果の分析から、アスペルガー障害 (AS) 児と高機能自閉性障害 (HFA) 児の認知特徴の相違を検討した伊藤 (2007) は、AS 児の VIQ 優位と HFA 児の PIQ 優位を見いだした。群指数では、AS 児においては知覚統合が他の群指数より低かったが、言語理解は HFA 児に比べ高かった。さらに下位検査評価点に関しては、AS 児においては、組合せが著しく低く、HFA 児では、類似、単語、知識が AS 児に比べ低い結果となった。これらから、AS 児に対しては言語による聴覚の手がかりを活用した支援が、HFA 児に対しては視覚の手がかりを活用した支援が有効と考えられたと報告している。DSM-5 の診断基準による ASD には、AS や HFA が含まれていることから、映像のみという視覚からの情報よりも、音声と映像という視覚と聴覚からの情報が増えたことにより、正当数が多くなったと考えられる。

本研究は日本学術振興会科学研究費(基盤研究(C)課題番号: 17K04949, 代表: 伊藤恵子, 基盤研究(C)課題番号: 16K04318, 代表: 小林春美), 十文字学園女子大学プロジェクト研究費の一部助成を受けて行われた。
 (ITO Keiko, YASUDA Tetsuya, TAKADA Eiko, KOBAYASHI Harumi)